

SDGsを軸としたカリキュラム・マネジメント —学校全体で取り組む探究的な学びの試み—

くさもと
蒼下 和敬

I 学習指導要領上の SDGs の位置づけ

筆者の勤務する山口県立響高等学校（以下「本校」とする）では、2018 年度後半の半年をかけて、SDGs の視点で校内の様々な教育活動を統合する取り組みを行い、学校の教育活動の一体化と活性化を試みた。本稿では、その経緯と結果を報告する。

SDGs とは、国際連合が 2015 年に採択した Sustainable Development Goals（「持続可能な開発目標」）の略称で、ジェンダーや貧困、気候変動といった 17 のテーマについて、国や企業、個人の垣根を越えた取組によって 2030 年までの達成をめざす目標である（図 1）。

2018 年公示の学習指導要領では、持続可能な社会・地域づくりに向けて諸課題を探求する学びが強調され、とくに地理では、「国際連合における持続可能な開発のための取組などを参考」にした教育

活動を展開するよう求めている。また、同年に示された学習指導要領解説（地理歴史編）では、その好例として SDGs をあげている。

II 学校教育における SDGs の実践事例

SDGs に関する教育活動は、これまでも数多く実践が見られる。国際協力機構（JICA）が発行する月刊誌『mundi（ムンディ）』では、全国各地の学校の SDGs に関する実践事例「世界につながる教室」を連載している。たとえば、中学校で夏休み課題や修学旅行のなかで SDGs に関する場面を見つけて発表する実践⁽¹⁾や、高校の総合的な学習の時間で SDGs を用いて世界の諸課題を探究的に学習する実践⁽²⁾が見られ、生徒の前向きな姿勢がよい成果へつながっている。一方で、他の研究会などの発表事例を含めて、SDGs を取り入れた学習の多くは、プロジェクト（課題研究）学習として取り入れられているものが多く、日常の各教科・活動全体を統合した取り組みへ期待される状況がある。

この点に向き合う実践を試みたのが吉村憲二⁽³⁾である。吉村は、日常的な授業の中で、どの学習内容が SDGs と向き合うものであるかを検討した。その結果、地理は SDGs の目標と重なっており、つねに振り返りながら改善することで十分に目標と向き合う授業ができるとした。



図 1 SDGs の 17 目標のロゴ(校内キャンペーン用のポスター)

吉村の実践と検討は示唆に富んでおり、これを地理に限らず、全教科・活動で取り組むことができれば、さらに実りの多い教育活動が展開できるのではないだろうかと考えた。

Ⅲ 諸課題教育を体系化する SDGs

学校教育の現場には、日々様々な社会的要請を受けた諸課題教育が増え続け、たとえば主権者教育、消費者教育、環境教育等のいわゆる「○○教育」が多数立ち上がっている。しかしながら、それらは相互に関連性があっても個別に計画されることが多く、学校全体の教育活動の中で一つに体系化させていくことは容易ではない。

こうした課題意識に向き合う一つの方法としてSDGsを学校の教育活動の展開軸に取り入れることが考えられる。SDGsは、その特徴として誰もがあらゆる諸課題に向き合う包摂性・包括性をもつ。学校の教育活動では、諸課題教育のみならず、各教科・活動の日常の学びでも社会の諸課題に触れる場面は多く、それらをSDGsがコーディネートし、相互に関連づけさせることができると可能になる。

そこで本校では、SDGsをカリキュラム・マネジメントの展開軸として学校全体で取り組むことにより、各教科・活動で展開される日常的な学びが教科・活動の枠をこえてつながり合い、学習内容が社会の諸課題に向き合うものとして価値付け、意味付けされるのではないかと考え、2018年後半から取り組んだ。

Ⅳ SDGsプロジェクトの実践

1 本校の概要

本校は、山口県西端の下関市郊外にあ

る普通科の高校である。2019年度をもって近隣の高校との統廃合による閉校が決まっており、現在は高校3年生69人しかいない。年々縮小されていく行事やフロアごとに使われなくなる教室棟を目のあたりにし、「どうせなくなるし」という生徒の口癖もよく聞く。

SDGsはあらゆることに挑戦できる。教科などの枠をこえて全生徒・教職員で取り組むことができるSDGs学習に挑戦することで、学校に活気が生まれ、閉塞感を打破できるのではないかと考えた。

この企画が立ち上がったのは10月であったため、半年間の実践となった。「実施可能ならとりあえずやってみよう」という方針を掲げ、生徒・教職員の立場に関係なく様々なことに挑戦した。紙幅の制約により、本稿ですべてを報告することはできないので、すでに「地理教育研究会会報」(3月号～4月号)で報告した基礎的な学習活動(前半3か月の取り組み)の報告は簡潔にまとめ、発展(総括)的な学習活動(後半3か月の取り組み)をおもに報告する。

2 前半期のおもな取り組み

①キャッチコピーの設定

Hibiki SDGs Project ～だれ一人取り残さない～

②職員研修・全校集会での合意形成

全生徒教職員がSDGsの取り組みに理解と关心をもち、温度差が出ないように努めた。

③SDGsシールの作成と配置・配付

SDGsの17の課題目標ロゴをシールにし、授業などで課題に関連する場面でシールを配付して学習内容とSDGsを関連づけることができるようにした。ま



図2 SDGsの17目標のシールを置いたスタンド

た、教職員・生徒の誰もが自由に活用できるよう、校内にシールスタンドを設置した。

④SDGsについての基礎学習

地理歴史・公民科をSDGs学習のコア教科として「SDGsとは何か」の理解を深める学習を行った。授業では、17の班に分かれて、各課題目標を調べてプレゼンテーションを行うことにより、全体で学びを共有した。

⑤内容をSDGsと関連づけた授業・活動

各教科等の学習活動において、学習内容をSDGsの諸課題と関連づけ、該当する番号のシールを配付した。

⑥SDGsコーナー設置による知の共有

生徒が学習で作成した成果物やSDGs関連の資料・書籍を校内数か所に展示し、校内でどのような取り組みが行われているのかを全体が共有できるようにした。

⑦「SDGs通信」の発行

校内全体での情報を共有するため、「SDGs通信」を発行した。表面はSDGsに関する校内外の動きなどを紹介し、裏

面には「今週のイチオシSDGs」(SDGsに関わる学びなどのうち、他の人に紹介したいものをレポートする取り組み)を毎回約25人分掲載した。

これらの取り組みによって、学習内容が実生活・実社会の真正の文脈の中で取り扱われることとなり、生徒は自分が学んでいる内容が、どのような諸課題に向き合うものなのかという視点が生じ、学びの価値づけや意味づけ(レリバанс)を高めさせることができた。

3 後半期のおもな取り組み

①実社会での取り組みを学ぶ

本校のSDGsプロジェクトでは3学期の活動が後半期となる。後半期は、前半期のSDGs諸活動で培った土台をもとに、社会で実際に取り組まれている活動について学んだり、生徒自らがSDGsを他者に伝える活動を行うなど、発展的・総括的な学習活動を行った。以下、おもなものを簡潔に報告する。

本校の教育課題の一つに、社会とのつながりをもたせることがあがる。SDGsの場合も、定期考査などで評価を試みると、知識としては十分に身についていることがわかるが、実社会で生きた活動であるという実感は弱い傾向があった。そこで、SDGsを取り入れたCSR(企業の社会的責任)活動に取り組んでいる企業のレポートを取り寄せて校内で紹介・展示了した。その中で生徒の保護者を通して、勤務する企業(大手飲料メーカー)の、CSR活動を紹介する学習会を開いた。企業側にとって初めての試みとなつたが、協力を得て「保護者が講師となつた企業CSRの特別授業」という形で実施した。特別授業では、最初に6番(水と衛生)、12番(つくる責任つかう責任)

などのシールを配り、授業のねらいがSDGsシールを通して可視化できるようにした。また、授業の途中で、自ら気づいたSDGsに関わる側面があればシートに記録するよう指示した。

SDGsでは、校内販売をする法人などとも連携した取り組みを進めた。本校では障害者の生活を雇用機会の提供という側面から支えるNPO法人が、活動の一環として製造しているパンを定期的に校内販売している。パンの購入や交流を通して、ソーシャルビジネス的な取り組みを理解し、地域とともに生きる一員として支え合うしくみがあることに関心をもってもらおうと、SDGsシールを一定数集めた場合、条件つきで法人が販売するパンと交換できるという試みを行った。生徒たちは単にパンをもらうことだけを目的とするのではなく、法人の活動を支援することや交流が深まることなどの趣旨を理解し、積極的に取り組んだ。

②学びを他者と共有する

3学期には「SDGsプロジェクト」の総まとめとして、これまで学んできたことを地域の小学生に紹介することで、SDGsを通して地域とつながり、ともに課題意識をもつ契機とする活動を行った。生徒はこれまで、クラス別に17班に分かれて、SDGsとは何かを学んできたが、小学校との学習交流企画では、各クラスの班が合体し、4~5人程度で17の各テーマについて、小学生でもわかるように準備しなおすこととした。まずは、小学生の発達段階や学習指導上の注意点などについて、ピアジェやブルーナーなどを参考に学び、小学校4年生以上にもわかるような資料を作成した（実

際には、小学校側から1年生を含む全校48人すべてを参加させたい希望があり、再々構成した）。

生徒たちは、これまで同級生の前で発表する時に作った資料の提示や説明の方法では通用しないため、テーマや素材の精選、言葉づかいに注意したり、資料をイラスト化したり、寸劇や体験活動を入れたりするなど苦戦した。授業は、コア教科である地理歴史で担当したが、しだいに他教科の教員も指導に加わるなど、総がかり体制となり、生徒だけではなく教職員も学びを深める場になった。

教職員も、小学校にESD(SDGs)の研修として説明に出向いたり、小学校側から助言を受けたりしながら、高校生への指導に反映させたり、計画書や教材作成の際、参考にさせたりした。

当日は、17(パートナーシップ)班に「SDGsってなあに？」と題したオープニングと進行を任せ、すべての班がプラカードを持ってならび、「世界中の取り組みで改善されつつあるもの／さらに深刻になっているもの」、「日本の取り組みで達成しつつあるもの／まだまだこれからもの」をマスゲーム形式でならびかえたりするなどして、子どもたちに伝わるように工夫していた（図3）。

続いて、1~8班を前半、9~16班を後半としたポスターセッション形式の学習交流を行った。その際、小学生にもわかるような表現を使った「SDGs学習シート」（図4）を配付し、小学生は自分が話を聞きたいところを選んで、高校生からシールをもらい、学んだことを記録できるようにした。前半・後半ともに2回ずつ話を聞くことができるようとした。

小学生がどこに行こうか迷っている場



図3 小学生との学習交流会のオープニング

合は、待機班の高校生が誘いに行き、一緒に話を聞くなどして、学びながら交流を深めていた（図5）。

学習交流会後の感想からは、「小学生だからとナメてたけど、かなり大変だった。小学校の先生すごい」「ただ勉強して終わりじゃなく、だれか（とくに小さい子）に伝えることで、自分が勉強していることの責任を感じた」「教えることで自分自身が深く広く学びなおせた」などの記述が多数あった。

V 成果と課題

1 おもな成果

「SDGsプロジェクト」では取り組みの検証や評価を行うため、定期的にアンケートや振り返り活動、課題や評価問題などによる評価を実施した。本稿では、それらから得られた成果と課題の要点を報告する。

①生徒の学習姿勢・学習結果が向上した

「普段の授業を社会問題と関連づける

SDGs
～みんなが幸せになるための世界の「めあて」～

1 人間社会に届けている 2 食べるもの 3 まちづくり 4 環境を守るために 5 男女平等 6 水を守るために	7 おもてなし 8 勉強を楽しむ 9 みんなが暮らして 10 おもてなし 11 みんなが安全で 12 連携をかけて 13 大気を保つ 14 海を守る 15 地球を守る 16 和平をめざす 17 パートナーシップ	みんなが暮らし て育てるようにし よう。 いつでも誰かと 手をつなぐようにし よう。 男の人との どちらかと 手をつなぐようにし よう。 どこででも誰 かと一緒に水 を楽しむよう にしよう。 みんなが安心 で安全で暮ら せる「まち」 にしていく。 連携をかけな がらのまちつくり たり、無駄つか いをしたりしな いをしよう。 みんなが安全で 安心して暮ら せるようにし よう。 連携をかけて みんなが安全で 安心して暮ら せる「まち」 にしていく。 連携をかけて みんなが安全で 安心して暮ら せる「まち」 にしていく。 どんなこと でもおもてなし 方をしてい こ。
～17班のお話～ 教えてもらったことを書きましょう		
～1回目～ 教えてもらったことを書きましょう		
～2回目～ 教えてもらったことを書きましょう		
～総まとめ～ 教えてもらったことを書きましょう		

図4 小学生用の学習シート（両面）



図5 各班による発表のようす

ことによって、多くのことを学べた」など、学習内容がSDGsによって社会や生活のなかの真正の文脈に関連づけられ、いま学んでいることが何の役に立つものなのかという学習内容・活動の意味づけ、価値づけ（レリバランス）を高めることができた。授業では、「授業でみんなイキイキしていた」「授業の内容を前よりちゃんと聞く人が増えて、寝る人やふざける人が少なくなった」など改善が見られた。

学習の動機づけの高まりとともに、授業などに取り組む姿勢も向上し、定期考查においてSDGsと関連づけた問題の正答率はそうではないものと比較して、大きな差が見られた。この差は、単なる客観問題にとどまらず、論述問題やパフォーマンス課題においてもはっきりとしていた。

②学びに対する自己肯定感を高められ、社会性・積極性を育むことができた
SDGs学習という新しい探究活動に取り組むことによって、生徒に次世代のフロントランナーを担っているという意識、企業や法人との連携や小学校での学習交流を通して自分の学びが社会の役に立つという意識等が芽生え、自己肯定感

を高めると同時に社会性を高められた。

また、新しいことに挑戦することの重要性を体感でき、積極的に取り組む姿勢を育むことができた。

③生徒同士、教職員同士、生徒と教職員相互の協働性が生まれ、響高校の一体感が感じられた

「この取り組みで学校全体の一体感がすごく高まった」など、新しい知への探究や、ハードルの高い課題への挑戦によって本校が共通の目的に向かって一つになっていく雰囲気を体感することができた。また、教職員間の協働性が高まり、全職員でプロジェクトに加わって生徒を指導したり、アイデアを出し合う場面が増えた。

④カリキュラム・マネジメントを充実させることができた

教科横断的な取り組み、ハード・ソフト両面での学校全体での連携、各教科の授業や校内諸活動などの関連づけがSDGsによって無理なくコーディネートできた。

⑤新しい取り組みに柔軟にチャレンジでき、校内が活性化した

「みんなが楽しく、かついろいろな人

と関わりSDGsについて学べ(た)」「校内の雰囲気が変わった」など、校内展示や、教科横断的な学習、民間企業との連携や小学校との交流など、これまでではできなかったことにもチャレンジできた。それにより、校内が活性化した。

2 おもな課題

① SDGs そのものの理解に時間がかかる

生徒・教職員の意識共有、校外への説明では相当の苦労がある。SDGsの社会的な認知の高まりも求められる。

②つねに創造的・挑戦的である必要があつた

校内での理解の深まりと同時に期待も高まり、つねに野心的・挑戦的な試みが追求される部分もあった。本校では、基礎学習、日常的な実践が徹底されていたので、プロジェクトが乱立・暴走することはなかったが、少しずつ担当者の負担が大きくなっていた。

③取り組みやすい教科・科目と難しい教科・科目が、みられた

実社会や実生活に直結する教科などは取り組みが容易であったが、そうでない教科もあった。ただし、数学科などでは以前から生徒に課していた課題について、実生活と結びつけて考察させるなど真正的の文脈に近づける試みもなされた。

④個々人の温度差がみられた

生徒の間で、取り組みに対する温度差はあり、ごくわずかではあるが、消極的な意見もあった。ていねいな説明や個々人へのフォローなどによる改善も必要である。

VI さいごに

本稿では、校内全体での教科横断的な

学びへの取り組みをSDGsをナビにして行い、その経緯と結果などについて報告した。本校固有の事情もあり、他校ではどのようになるか推測することができないものもあるが、各校での検討・実践の参考になれば幸いである。また、相互に実践による知見を共有できれば幸いである。

なお、本校の詳細な「実践記録」については、広島大学学術情報リポジトリに「SDGsを通したカリキュラムマネジメントの試み（実践記録）」（山口県立響高等学校）として登録しているので、ウェブ上で検索してご覧いただきたい。

注

(1) JICA『mundi』第63号 2018年12月

(2) JICA『mundi』第65号 2019年2月

(3) 吉村憲二「地理総合とESD」地理教育研究会第57回研究大会（札幌大会）発表、2018

（山口県立響高等学校）